

福島県立図書館
東日本大震災福島県復興ライブラリー

ブックガイド

No. 21 2019. 3. 12

■文学・体験記

『ことばの向こうがわ 震災の影 仮設の声』

安部 智海／著 法蔵館 2017.3 369.31/7¥173

2011年から2016年までの間、主に岩手県の陸前高田市と宮城県の名取市の仮設住宅を一軒ずつ訪問し、被災者と話をするという活動の体験記です。時系列に沿って章立てされており、時が経つにつれて変わっていく街や人々の声についてまとめられています。また、実際に訪問した内容だけではなく、心的支援の難しさや、孤独や苦悩に寄り添うことについても書かれています。

『線量計と奥の細道』

ドリアン助川／著 幻戯書房 2018.7 915.6/トリ187

芭蕉が歩いた『奥の細道』の行程には、東日本大震災の広大な被災地域が含まれています。本書は震災の翌年に『奥の細道』の全ルートを自転車で（主に）巡り、被災地の現状を肌で感じた著者の旅の記録です。津波で破壊されてしまった街で、放射性物質が降り注いだ農村で、多くのものを失いながらも困難を乗り越えようと奮闘している人々との出会いの記録でもあります。

■メディア・報道・写真集

『臨時災害放送局というメディア』

大内 斎之／著 青弓社 2018.10 699.21/¥18X

臨時災害放送局は、災害発生時に自治体が設置できる臨時のラジオ局です。東日本大震災においても複数の自治体で開設されましたが、従来よりも運営が長期化し、地域の復旧・復興にも双方向的に関わるようになっていった局がありました。宮城県山元町に設置された「りんごラジオ」、南相馬市の「南相馬ひばりFM」、富岡町の「おだがいさまFM」などを取り上げ、災害報道メディアとしての臨時災害放送局の役割の変化や、今後のあり方について考察します。

『原発震災のテレビアーカイブ』

小林 直毅／編著 法政大学出版局 2018.3 699.8/ｺ183

3月11日以降、私たちは様々な方法によって震災の情報を得てきました。中でも大きな情報源であったものに、テレビがあります。

テレビで放送された映像を記録・保管するのがテレビアーカイブです。これを用いた震災についての映像記録の研究も既に行われています。映像が捉えたその時、放送されたその時がそのままの姿で残っているテレビアーカイブ。この有用性が震災の経験を見つめなおすために役立つことが説かれます。

■各組織の震災対応

『証言 東日本大震災 ～1兆2000億円の地震保険金～』

森 隆／著 保険毎日新聞社 2014.3 339.5/ㄱ143

本書では、保険契約者や損保会社の各部門等が各々の立場から東日本大震災を振り返っています。申請のない契約者へも連絡を取り続け、業界累計1兆円超の保険金支払を行った実績の一方で、十分な保険金支払に至らなかった契約者の無念と決断を下した損保会社の葛藤を感じさせる事例もあります。阪神・淡路大震災を機に地震保険はある程度定着しましたが、東日本大震災を経て、改めて地震保険について知ることの大切さを感じます。

『「まδειの村」に帰ろう 飯館村長、苦悩と決断と感謝の7年』

(ワニブックス PLUS 新書 225)

菅野 典雄／著 ワニ・プラス 2018.4 LS369.31/K3/2

「まδει」とは「丁寧に、心をこめて、手間暇を惜しまず」という意味を持つ方言で、著者である菅野村長は「まδειライフ」を村の暮らしの理念として掲げてきました。飯館村は、震災に伴う原発事故の影響で全村避難を余儀なくされていましたが、2017年3月31日、一部地域を除き避難指示が解除されました。震災発生から7年、飯館村の「これまで」と「これから」を、村長という立場で村を支え続ける著者が語ります。

『福島双葉町の小学校と家族 ～その時、あの時～』

小野田 陽子／著 コールサック社 2017.3 LS376.2/018/1

震災当時、双葉北小に勤務し、県内を避難した著者の体験記です。経験したものしか書けない緊迫感があり、学校の状況や子どもたちの安否確認、避難の経緯、母親としての心境など詳細に書かれています。担任していたクラスの児童に送った学級通信などを基にしており、子どもたちとの絆や励まし合った様子などが綴られています。

平成30年度 福島民報出版文化賞特別賞受賞作品。

■農林水産業・動物

『聞く力、つなぐ力 3・11 東日本大震災 被災農家に寄り添いつづける普及指導員たち』

日本農業普及学会／編著 農文協プロダクション 2017.3 611.1512/ニホ173

東日本大震災及び東京電力福島第一原子力発電所事故は、被災地の農業にも大きな被害をもたらしました。本書は、岩手、宮城そして福島の「普及指導員」に対する聞き書きです。農業の技術や経営に関する専門家である普及指導員は、農業者（農家）の課題解決のため、農家と共に活動しています。未曾有の災害と原発事故の最中、彼らが農家とどう向き合っていたのかを知る貴重な記録であり、両者の協働の様子が浮かび上がってくる1冊でもあります。

■復興・防災

『復興に抗する』

田中 英樹／編 高村 竜平／編 有志社 2018.2 318.6/ナ182

東日本大震災は私達の生活に大きな問題・課題をもたらしましたが、震災前の社会にも「問題・課題」がなかった訳ではありません。私達は「これまで」も様々な問題に対処してきたし、「これから」もそうして行くことでしょう。この本では、戦後の国土開発の時代から営々と「いまここ」の問題に対処してきた地域の人々の姿を描き出すことによって、そうした歴史を背負いながら生きる私達が目指す、私達の「復興」とは何か、ということ問いかけています。

『復興の空間経済学 人口減少時代の地域再生』

藤田 昌久／著 浜口 伸明／著 亀山 嘉大／著 日本経済新聞出版社 2018 332.107/フマ182

近年、東京圏への人口集中や地方の人口減少等の現象を、経済メカニズムに基づく「集積力」と「分散力」から説明する「空間経済学」が注目されています。この本は日本で空間経済学の研究をリードしてきた藤田昌久氏らのグループが、震災直後から被災地を調査し復興の在り方を分析したものです。

東日本大震災は「人口減少という新たな局面から起こった最初の大規模な災害」であり、これまでとは異なる復興政策が必要なこと、各地域の多様な自然資源や地域コミュニティを活用して過度の人口流出を食い止めるべきことなどが示唆されています。こうした論点は、東日本大震災だけでなく、今後起こりうる災害への対応を考える上でも意義深いものです。

『月刊 地域支え合い情報 東日本大震災・被災者の暮らしを豊かにする』VOL. 68 2018年4月

東北関東大震災・共同支援ネットワーク地域支え合い情報編集委員会／編集 長寿社会開発センター 2018.4 Z369/T1

震災により仮設住宅や被災した自宅などで生活する方の孤立防止や生活復興、地域のまちづくりを手助けするための情報を掲載した「地域支え合い情報」。2018年4月号では福島県から宮城県に移住した乳幼児と母親のためのサロン「きびたん'S (キビタンズ)」を紹介しています。毎号、豊富な写真とともに笑顔になれる活動の実践事例を紹介。東北が元気になるためのヒント満載の情報誌です。

『そなえるふくしまノート 防災ガイドブック』

福島県[危機管理部]危機管理課／[編] 福島県[危機管理部]危機管理課 [2017.12]
L369.3/F2/50 369/7

「備える」では「家族で確認しよう」「助け合うこと」「防災グッズの準備」「防災訓練に参加しよう」など、「身を守る」では「地震」「津波」「火災」「風水害・土砂災害」「大雪」「火山噴火」「原子力災害」について、ベコ太郎のイラストでわかりやすく解説しています。福島県のホームページでも見るすることができます。大活字版もあるほか、福島県のホームページでも見るすることができます。

『被災地から学ぶかぞくの防災』

日本アムウェイ財団／著 徳間書店 2018.3 369.31/㊦183

【被災者の体験談&アドバイス】震災時に困ったこと、震災時に役立ったもの、震災後のところがけをイラスト付きで掲載しています。

【もしも巨大地震が起こったら】地震発生から一年間という長さで時系列順に載せています。

【実践・家族の防災訓練】家族の非難マップ、防災アウトドア、防災学習体験施設をエッセイ漫画で紹介。

【もしもの時の日用品活用術】エプロンで即席ベビーチェアなど、いざという時助かるアイデアがイラスト手順付きでわかりやすく紹介されています。他情報多数。

『3.11 東日本大震災と「災害弱者」』

藤野 好美／編 生活書院 2016.12 369.31/㊦16Z

日常生活に支援の必要な人を災害時にどうサポートすればよいのか。何が不足していて何がありがたかったのか、3.11の経験から生の声を聞き取りまとめられています。一方でサポートする人も被災者であり、家族の安否を心配しながら24時間寄り添うことの難しさも語られます。要支援者の所在確認、福祉施設が福祉避難所として機能するための仕組みづくりなどの様々な提案を活かし、日常のサポートから災害時につながる支援のあり方を関係者が対話を重ね考えていく必要性を説いています。

『せまりくる「天災」とどう向きあうか』

鎌田 浩毅／監修・著 ミネルヴァ書房 2015 450.981/牝15Z

地震や津波のほかにも、集中豪雨や火山噴火など、日本列島を襲う天災は数知れず。これらの自然災害は、超常現象などではなく、地球科学で説明のつく自然現象です。この本では、地球のなりたちや内部のしくみ、災害が起こるメカニズムを、全ページフルカラーのわかりやすいイラストで解説します。それぞれの災害にどう備え、発生したらどう行動したらいいのかも網羅。災害への備えとして、地球の最新知識も備えてみませんか。

『すごい廃炉 福島第1原発・工事秘録<2011~17年>』

日経コンストラクション／編 小学館 2016.5 LS596/A10/1

おそらく数十年後まで私たちの耳から消えることがないであろうキーワード「廃炉」。しかし誰によって、どのような作業が進められてきたのかを知っている方は案外少ないのではないのでしょうか？原子炉建屋をすっぽり覆う「建屋カバー」の建設や汚染水流出を防ぐ「凍土壁」等、廃炉への道のりには建築業者の地道な努力と閃き、そして最新技術の粋が集められています。今後も続く廃炉作業の「最初の一步」をご覧ください。

『復興ごはん』

味の素グループ東北応援ふれあいの赤いエプロンプロジェクト／編 小学館 2016.5
LS596/A10/1

2011年10月に始まった「ふれあいの赤いエプロンプロジェクト」は、「食」をテーマに、一緒に料理を作ったり、健康について語り合う場を作ったりすることで、被災地の方々に触れ合い、声を聞く活動を続けてきました。本書は、その活動を紹介することで、震災を乗り越えた方々が、復興の過程の中で、「食」をどのように捉えていたのか、また、「食」を通して、周りの人々はどのように寄り添っていったのかを考えます。

■エネルギー

『アメリカの電力革命 広域運用からローカル運用まで』（エネルギーフォーラム新書 037）

山家 公雄／編 エネルギーフォーラム 2017.3 540.9253/牝173

日本のエネルギー戦略の方向性を考えるためには各国の動向を知ることが不可欠です。震災後日本では電力の小売り売買が可能になりましたが、世界を見ても再エネや自然エネルギーの普及により、大手供給会社による電力の大量供給という構図が崩れつつあります。このことは、資本主義経済の原則をとるアメリカにおいても例外ではありません。本書では、ヨーロッパに比べ、近頃紹介される機会が少なかったアメリカについての現状を調査し、紹介しています。

■子ども向け

『ほんとうの空の下で』

ノグチ クミコ／著 NOGUCHI PRESS 2017.10 LS726.7/N3/1

浪江町に暮らしていたおじいさんと愛犬シマの震災前の日々から避難生活、そして亡くなるまでを描いた字のない絵本です。この絵本を読むと、どこにも記録されることのないまま失われゆく震災と原発事故によって変えられてしまったたくさんの人びとの大切な暮らし、その数の多さとかけがえのなさを想像せずにはられません。

■その他

『しあわせになるための「福島差別」論』

池田 香代子／著 開沼 博／著ほか かもがわ出版 2018.1 LS369.31/I31/1

原発事故がもたらした差別の分断を乗り越えるためにはどうしたらいいのかについて書かれた本です。様々な情報が流れ、福島県民が差別を受けてしまっている現実が生まれています。それを無くすには「科学的な議論の土壌を共有」することが必要になります。「それぞれの判断と選択をお互いに尊重すること」はもちろんです。まず科学的にどうなのかを知ることが大切だと実感できます。福島に関わる執筆者たちが、「福島差別」について書いています。

『はみだせ！ あんこちゃん 記憶のなかの新地町』

新地町復興応援隊／編集 新地町復興応援隊 2016.3 LS726.1/S6/1

新地町は浜通りの一番北にある風光明媚な人口約8千人の町です。震災では大きな津波被害を受けましたが、力強く復興の道を歩んでいます。この本は、あんこちゃんという主人公の女の子が江戸時代、明治時代、震災前、そして現在とタイムスリップしながら各時代の新地町を紹介するマンガです。セリフもふりがなつきで、お子さんでも読みやすい内容です。読んだら新地町に行きたくなる！？